

視線は幼児の行動制御を促すのか —不可視な他者の存在の効果の検討— (中間報告)

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 (配置大学：千葉大学)
千葉大学グローバルプロミネント研究基幹 高橋実里

Does gaze control young children's behavior? : The effect of the existence of invisible others.

Doctor Course, The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University,
Institute for Global Prominent Research, Chiba University, TAKAHASHI, Minori

要約

子どもたちが自らの行動や欲求をコントロールすることは、適応的な発達の基盤の1つとなる。近年、ヒトの行動制御に関わる外的な要因として、視線(目)の影響が注目されている。成人は視線(目)があることによって自らの行動を制御する一方、いくつかの発達研究によれば、幼児は視線(目のイラスト)で自らの行動を制御しない。しかし、子どもたちは視線に敏感である証拠もあり、視線が幼児の行動制御に関わらないと結論することは性急である。本研究では、幼児の行動制御における視線(目)の影響をより詳細に検討するため、「不可視な他者の存在」の効果を検討する。子どもも他者の視線に敏感であることを踏まえれば、不可視な他者の存在を教示することによって「見られている感覚」が高められた場合に、視線によって幼児も自らの行動を制御する可能性がある。

【キー・ワード】 幼児, 自己制御, 視線, 誘惑抵抗課題

Abstract

Self-regulation (e.g., controlling behaviors and desires) is essential to the children's adaptive development. Researchers have paid attention to the gaze's (eyes) influence on behavioral regulation in recent years. Adults adjust their behavior by the gaze (eyes), while some developmental studies show that young children do not adjust their behavior by the gaze (e.g., illustrations of the eyes). However, there is evidence that children are sensitive to others' gazes, and it is hasty to conclude that gaze is not related to a child's behavioral regulation. In this study, to examine the influence of the gaze (eyes) on children's behavioral regulation in more detail, we examine the effect of invisible others. Children are sensitive to the gaze. If the existence of invisible others enhances their "sense of being seen," children may regulate their behavior by gaze

(eyes).

【Key words】 young children, self-regulation, gaze, forbidden toy task

問題と目的

幼児期の子どもたちが自身の欲求や行動をコントロールすることは、適応的な発達において重要な要素の 1 つである。例えば、子どもが目の前のマシュマロを食べたいという自らの欲求をコントロールする力は、将来の認知的・社会的な適応を予測する (Mischel, 2014/2015)。子どもたちはどのような場面で自らの欲求をコントロールできるのか、また、どのような要素が、子どもたちが自己をコントロールすることを促すのかを明らかにすることは、子どもの適応的な発達を考える上での 1 つの重要な資源になる。

近年、成人を対象とした研究では、視線（目）が社会的評価への懸念を生み、ヒトの行動調整を促すことが示されている。例えば、Bateson, Nettle, & Roberts (2006) は大学内にある飲料代を自己申告制で回収する集金箱に、目または花の写真を貼り、集金箱に入れられた金額の違いを検討した。その結果、花の写真よりも目の写真が貼られた時に集金額は高くなり、「正直に金額を支払う」人数が多いことが示された。つまり、視線（目）があることによって成人は正直に行動することを促された。

しかし、5 歳頃から幼児も他者の評価を懸念するようになるものの、彼らは視線（目）によって行動を調整しない (Fujii, Takagaki, Koizumi, & Okada, 2015; 奥村・池田・小林・松田・板倉, 2016)。例えば、奥村ら (2016) は、目の前に実際の他者が存在する状況、他者を想起させるような目のイラストが置かれた状況、統制刺激として花のイラストが置かれた状況で、5 歳児の行動が異なるのかを検討した。その結果、目の前に他者がいる条件では、幼児は他児の分のシールを自分のものにするといった利己的行動が抑制されたものの、目のイラストでは利己的行動が抑制されなかった。つまり、彼らは目の前にいる他者からの直接的な評価を重視していることが示唆された。

では、成人とは異なり、幼児はなぜ視線（目）で行動制御が促されなかったのだろうか。1 つの可能性は、幼児は視覚的な情報 (e.g., 目のイラスト) のみでは「見られている」という信念を形成しなかったかもしれない。その理由として、他者の存在を明確に教示することで、幼児も自らの行動を制御する証拠がある。Piazza, Bering, & Ingram (2011) は、5 歳児に「目には見えない存在であるプリンセス・アリスがそばにいる」と教示し、得点に応じて報酬をもらえるゲームを行わせた。このとき、幼児は高得点を得るために、実験者に気付かれずに不正をすること (e.g., 得点しやすい場所に移動する) が可能であった。実験の結果、教示を受けて「プリンセス・アリスがそばにいる」という信念を形成した幼児は、そうでない幼児に比べてゲームのルールを守る (i.e., 不正をしない) ことが示された。

さらに、2 歳未満の子どもでも、罪悪感 (ばつの悪さ) を感じたときに他者の視線から逃れようとすることがあり (Barrett, 2005)、彼らは自身の行動に対して向けられる他者の視線には敏感である。このような証拠を踏まえると、幼児が視線（目）によって自らの行動制御を促されるか否かは、「他者に見られている」という信念の形成に依ると考えられる。そのため、視線が幼児の行動制御に影響

しないと結論することは性急であるようにみえる。

そこで、本研究は奥村ら（2016）と Piazza et al. (2011) を参考に、目のイラストとともに「不可視な他者の存在についての教示」を与える条件を設定し、視線（目）が子どもの行動制御に与える影響を検討する。具体的には、花よりも目のイラストがあり、かつ不可視な他者について教示を受けたときに「見られている」という信念が形成されやすくなり、幼児は最も自らの行動をコントロールする可能性を検討する。

また、これまで幼児の行動制御における視線（目）の影響を検討した発達研究では、他児への向社会的行動や他児のシールの奪取といった、主に他者に対する行動の調整が検討されてきた。これに対し、本研究は視線（目）によって幼児が「自らの欲求をコントロールするか」に焦点を当てる。自らの欲求のコントロールは、向社会的行動をはじめ、適応的な行動の基盤となるものであり、本研究の結果は行動制御における視線（目）の影響の萌芽を示すことに繋がる。

方 法

参加児

幼稚園・保育園に通う 4-6 歳児、計 100 名程度（男女同数）を対象とする。

課題・手続き

調査は個別面接で行う。ラポールの形成後、すべての参加児に魅力的なおもちゃに触らないで待つことを求める課題（以下、誘惑抵抗課題）を実施し、幼児の行動を小型カメラで記録する。このとき、参加児を以下の条件にランダムに振り分け、条件によって幼児の行動が異なるかを比較検討する。

導入段階 ①不可視な他者条件：Piazza et al. (2011) を参考に、「プリンセス・アリスは不思議な力を持っている優しいお姫様だよ。今は姿を見えなくして、ここに座っているよ。〇〇ちゃんとお友達になりたいみたい。」と教示のみを行う。②画像のみ条件：奥村ら（2016）を参考に、参加児の目線の高さに目または花のイラスト（Figure 1）を掲示する。③不可視な他者・画像あり条件：はじめに「プリンセス・アリスは不思議な力を持っている優しいお姫様だよ。今はこの絵に変身していて、〇〇ちゃんとお友達になりたいみたい。」と説明し、画像のみ条件と同様に目または花のイラストを掲示する。

誘惑抵抗課題 それぞれの条件で導入を行った後、誘惑抵抗課題を実施する。誘惑抵抗課題では、はじめに参加児におもちゃの遊び方を示した後、「実験者は忘れ物を取りに行ってくるよ。実験者が戻るまで、おもちゃを触らずに待っていてね。」と伝え、実験者はおもちゃと参加児を残して退室する。実験者が退室した後の 5 分間で、参加児がおもちゃに触った回数（違反回数）と、最初におもちゃに触るまでの時間（違反潜時）や、おもちゃに触り続けた時間（違反継続時間）を計測し、条件による違いを検討する。



図 1 課題で使用するイラスト

倫理的配慮

調査に当たっては、施設長・保護者および参加児本人の同意を得た上で実施する。なお、本研究は著者の所属大学の研究倫理委員会の承認を得ている。

現在の進捗状況と今後の予定

幼稚園にて調査を実施し、一部のデータを取得した。今後は追加の調査を行い、必要な参加児数のデータを収集していくとともに、データの分析を行っていく。

引用文献

- Barrett, K. C. (2005). The origins of social emotions and self-regulation in toddlerhood: New evidence. *Cognition and Emotion, 19*, 953-979.
- Bateson, M., Nettle, D., & Roberts, G. (2006). Cues of being watched enhance cooperation in a real-world setting. *Biology Letter, 2*, 412-414.
- Fujii, T., Takagaki, H., Koizumi, M., & Okada, H. (2015). The effect of direct and indirect monitoring on generosity among preschoolers. *Scientific Reports, 5*, 9025.
- Mischel, W. (2014). *The marshmallow test: Understanding self-control and how to master it*. Great Britain: Bantam Press. (柴田裕之 (訳) (2015). マシュマロ・テスト: 成功する子・しない子. 早川書房.)
- 奥村優子・池田彩夏・小林哲生・松田昌史・板倉昭二 (2016). 幼児は他者に見られていることを気にするのか: 良い評判と悪い評判に関する行動調整. *発達心理学研究, 27*, 201-211.
- Piazza, J., Bering, J. M., & Ingram, G. (2011). “Princess Alice is watching you”: Children’s belief in an invisible person inhibits cheating. *Journal of Experimental Child Psychology, 109*, 311-320.